早稲田大学図書館
011188433075

病[illegible]録

昭和四歳秋

NOTE BOOK

染谷進著

歌曲十首

月清く松の梢に出でくれば葉蔭
散らばるそのまどの中
秋風に揺れたてる川霧軽夕をはめ
けく空の来るまどの中
秋声を送り来し木々もつれあひさ
ろひ入り来るまどの中
まどいっぱいにきひろげし松々
木々ひっかかり明るく光る

特別
門 ヌ6
號 7421
冊

昭和44年7月28日
吉田正一氏
寄贈

44 6996

十月十七日

○昨日で丁度一ケ月入院。肋膜は殆んどよろしいが、わるけれどもラッセルを時に聴く。熱なく胸痛微弱。体重、十四貫丁度。

○太陽燈

○兄様から新聞に添へ、小包二つ。漱石全集と世界大衆文学全集と。海の義賊とケーニックスマルクとをよむ。

○味噌汁をとる。ちと濃しかりし。

十月十八日、晴

○い丶天気だ。ふとんを乾す。麦藁帽をかぶつて日向ぼつこをする。病を忘れたるに似たり。霞ケ浦の飛行船がとんだ。ツエッペリンを見た目には可愛い。

○午後寝帽を冠り寝間着にて日光浴をなす。向ふの部でより人見て笑ふ。

○ある日日向ぼこをやり過ぎて夕方風邪気なり。

○夜、又[illegible]のコーヒーを御馳走になる。

十月十九日

○のどろつとろし。其他はたいへんいゝこゝろなり。

○太陽煖、

○ケイ二の寄夢息子をよぶ。

入窓一片雲
吹桐一陣風
病裡因眠健
懶開朦目時

白雲入蛾窓 出
秋風訪檐桐
病裡閑眠破
両眼自開時 夢

○十月二十日
雨陰こもる。午後晴、一日気分悪しく熱七度へ

○十月二十一日、
快晴、朝睡を催をし一時ち程假睡。
ランセル卓立ず。気分よし。大塚君来る。
奥海伯父来る。
三[illegible]君より来る

○午後雪寝帽ハ女中ハリ寝間着ハて日光浴をなす。向ふの二階でより人々見て笑ふ。

○あまり日向ぼことやり過ぎて夕方風邪気なり。

○夜、足裏のノユーヒーを御馳走になる。

十月十九日

○のびろっとろし。身体はたいへんいゝぐあいなり。

○太陽燈、

○ケイ二の誘夢息子をよむ。

入窓一片雲
吹桐一陣風
病裡因眠催
懶閑得自時

白雲入窓
秋風詩橙桐
病裡閑眠破
両眼自南時夢

出

○十月二十日

雨陰ニなる。午後晴、一日気分悪しく
熱七度へ

○十月二十一日、

快晴。朝睡を催をし一時好き輕假睡。
ラソセん卓立ず。気分よし。大里君来る。
呉塘伯父来る。
三浦君より来[illegible]
鍊愛録の印譜を送り来る。
青蓮眼、一函め二つせ。

十月廿二

○気分よく、晴、月あかるさ

○ふるえはやみ

○ボアベニコをよむ

○起立ならぶ

十月二十三日

○姉さん菊の花をさしてくる。菊花香を放し

○心懐さわやかなり

○一葉叩地音

○回首孤雲還

病居静寂裡
一葉叩地音

病裡有清閑

病窓静寂裡
黙然坐床上
薄暮空如水
孤雲還南天

薄暮空如水
病窓静寂裡
~~静中動十莫~~
孤雲還南天

十月廿四日　金

○薪木を許さる、三十分づゝ、二度、

○目方十四貫二百、五十三キロ、

○午後、科堀の土手に登り暫く日光浴し
かへる。麦藁帽をかぶれり。人くじろ～見る。
土のにほひ、草のにほひ、空の水、大きな空
すべて涼しよしまばゆかりき。

夕方熱七度一分
疲れを覚ゆ

十月二十五日 雨 土

○痰少し、気分稍あし
○十九日の外出す。宅見亀之介入院の為之。
○午後コーヒーを少飲試みたり。うまし。
○夕方熱七度
○夜九時就寝
○夜半目さめて後、秋の千萬声を聴盡す

聴盡秋声千萬聲 誦
暁眠寛且安穏身
人生五十一朝夢
寓世何嫌蟬嘒短命

十月廿六日 雨 日

○あれ気味なり、むし暑く気分甚悪し。
○熱七度、夜七度一分 七度一分
○宍戸伯父来る、
○睡眠、胸痛あり、或は肋膜に水たまるかと心配す。

十月廿七日 晴

○痰、下剤やや、気分稍よし

十月廿八日 曇 月

○痰少量 気分甚よし
○X光線
○静養、二ケ月ばかりなり
○六度九分

宍戸伯父来る

六度九分

十月廿九日 雨 朝六度四分 火

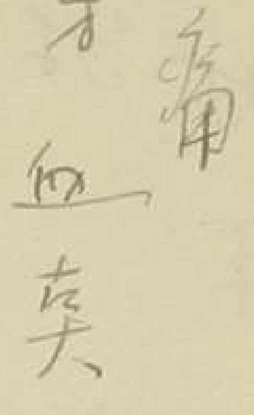
○病状善 気分よし
○雨ふりなれば一日ごろごろして送れり
○夕方熱六度九分
○夜九時 六度三分
○X光線の像は良好なる由、像がはっきりと
してきたのは昨日よりはじめたなれと、
静かにして熱が出なければはっきりしたのである。
○毎日注意して試験的運動を試みようと
思ふ。
○病気のことは知ることを要せぬ、要ちよん動いて
たゞ大きくなったまゝなのである。
♡山ノ坊ダラス之新の鷗をせらみ。

十月卅日 雨のち曇 風寒し 水

○六時起床、熱六度三分 六度三分
○吉田へ手紙を書く。山ノ坊へも手紙。
○八時半ー九時 静臥
○九時ー九時二十分 散歩の 六度四分
○十時半ー十一時 静臥 六度四分
○十一時半
○二時より二十分散歩 散歩の 六度八分
○三時 検温 六度八分
○四時半 喀痰無 六度八分
第一の失敗？。
恢復の過程に於て失敗にも中なり
病勢には何の影響もなし 安心々々

十月卅一日 木

○三度目をさます、痰粘多し 六度五分
○寝汗
○胸痛
○夕方血痰 一 六度八分


これ程の矢

十一月一日 金

○一時ヲ目を醒す 痰、少量 六度三分
○暁方寝汗
○痛み減り、気分よし
○一週間内に起きうる由
○醫者君は四紀させ和里は安心させる
○夕方迄 六度七分
○切腹せる人入院す、長さ十五センチメートル
深き腹膜に達し腸間膜出す
愚論なことより女婦ダニワをしたる婦人
今夜がねがしき由。
「痛いよう」し「苦しい」など言ってうめく。

○十一月二日 土曜 曇 寒し

○暁方目を醒す、五時、 痰ヤヤ多し 六度四分
○胸痛減少、気分よし
○ラヂオ聞えず、月曜より離床を許さる
○割腹居士今日は落着いてうめき声を発せず、命をとりとめた由
○夕方 六度八分

喀血風寒二夕
仰臥怯々然
天井

若心を如何せば
如苦ゆまぬ暮ふ
就内日々経何方
日々不来未来客

十一月三日 日曜 晴 寒気甚だし
○拂曉血痰目を醒ます 痰の量 六度三分
○午前日なたぼこを一時間静養
○胸痛殆んどなし
○気分よく食欲盛んなり
○大塚為さんのおみやを富士子君持って来てくれる
兄さんより三冊と新聞を送ってくれる
○夕方熱 六度七分

十一月四日 月 晴
○今朝目を醒す 痰絡まし 血痰あり 六度四分
○気力回復盛んなり、食欲盛んなり
○胸痛微弱
○秋艸道人の繪葉書を呉れる。
昨日叡山の由
○姉さんお菓子を持って来てくれる
○小田川君來訪
○正午熱 六度五分
○六時十六分へ入る 夕方 七度
○手足揉より除養法を習く、母にしみて

うれし。
○九時就床　六度七分

十一月五日　晴

○六時少し前目を開く、盗汗なく心地よし　六度三分
痰十分量あり、洗面後血痰なし
○昨日節やがかつきてみし菊日ん晴らし
美し、すき秋なり

轉の月の窓にさし来ぬ枕辺の白
菊の花きよらんゆらぐ

○知腹居士は助ってアった。平気でゐるさう
である。娘さんはまだなり。

○十一時半　六度五分

○ラッセル聞えず、希望に満みち
○ヴェ・ダイニのヴリイニ家の悲劇をよむ
○九時就床、寝つかれず

十一月六日　晴

○六時起床、痰少量、　六度二分
○八時一九分　静臥
○朝月のひえびえとして鳴き大かは鋭
十日菊にほひをたつ

○十時五分　日光浴
池紀念一六〇〇　鈴木千代送る
比山の丘

○ 夜より十九号へ移る　安眠
雨降りいで、あたたかき晩なり

十一月七日　雨

○ 心地よく目醒む、六時十分　六度四分
○ 外ゆく人家の鶏鳴もよし
○ 陰雨霏として　惨怛たる暗あり
○ 夕食　六度九分
○ 福井氏来り寺を訪ひ、学習院図書の返却を範読に托す
○ 八時半寝

○ 弘足氏来訪　鮑をもらふ
○ 張氏伯母来訪、
食欲はもわ進と向はず（しおす）伯父　力なき咳く
やりけてしかす　さつくゝる　へりにけり
しつけよしぬ
伯父が手はゆつゝみの見舞る釦の用せぬ、
しきりに痛痒重りましたか、
昨日死をよそ身と見つゝは暑さのへつき
ゆくものもなしと伯父の笑みます
○ 前山の白雲たちは禅寺楼の鐘の
音なて、静まる
くいきれかぬは
時雨雲寒き迫るかいも禅寺図の真葉
音もなく、静り

十一月八日 雨

○亡児の死にたる日なり 七回の忌日なり　　六度四分

○乾

○痰量 気分あし

○一日うとうと眠る、　　六度八分

○夕方

十一月九日 晴 土

○朝、痰~~[illegible]~~稍多し

○白雲をとりし太陽を蔽ふ

○胸部痛なるを覚ゆ　　六度四分

○午後二時、郵便局へ行く、途中寺田

○薬局にて買物

○夕方 熱、　　六度八分

○夜、寝つかれず、脈早し

十一月十日 雨 日

○五時に目を覚ます、痰稍多し　　六度八分

○身体だるく頭痛あり下痢

○胸部激痛、時々咳嗽あり

○八時　　六度七分

○十一時半　　六度八分

○好き日なり、室にあれば一日寝る覚悟

○四時半　　七度

○強風吹きまくる
火をつぎ葉をいれて之水よ

○九時半就寝

十一月十六日 雨 寒冷 月曜

○此の頃まよう強く寒冷なり
○睡る迄汗が出でうつゝと眠る。六度三分
○菓子をいれて居る部屋を看護婦が掃除してくれで気持がいゝ
○痰結多く血痰あり
○ラワセル全生園をやめる由。對白君のことなり。
○村岸、江口より手紙あり
○千葉半杉のおばさん千枝子の中に送る
○安子来る
○看護婦新聞をもってきてくれる 六度九分
○安眠
○無除さんとおる

十一月十七日 曇 火曜日

○心地よく目睡む、雨の音をきかず 六度七分
○痰結て多し
○静岡母さん来訪、但し知らぬ人なり。
○診察をうけのびのびなりと、大宮よりきたりし由
○背部にひびがよりかかりたる故痛みあり、二三日前のことなり、胸部に痛みなし
○無除外菌、消毒、新中無除むらけなり
○空気が無除臭くなったやうなり
○す美江君より手紙が、何はかしこスミリー
気味なり
○體重五十三キロ、十四貫二百目
水月 程増減なし
○午後母がおはりをおかしします

○停車場へ手紙を、入れにゆく、稲荷さんと
すましんみ紙を出す
○けさ手紙が届いてゐる　七度
十一月十三日　水　曇
○起く　六度四分
○七時すぎ朝めし
○兵、稲荷、咽喉ラッとうし
○ラッセル、傘立ず、
○書
○左胸部激痛に襲われ
○雲が西へ行かうか東へ行かうかとまよつて
ゐる。どうしたものか東京は東へ流れたら晴
西へ流れたら雨と信じてゐる為見てゐると少　六度五分
しづつ東へ流れてゐるらしい　それでも一日
うす寒く曇つてゐる。
○森田十次さんと松島君とがきた。賀陽宮を
迎ひにまわるさうであつた。三時過ぎ
○夜停電したので蝋をつけた。葉の
影が大きく壁にうつった。わびしい。
○夕方の熱　六度九分
○フセワクエートル三ん四ハウトをかぶつて伯のあき
ん主賓であつた。
○三時串君が来た

十一月十四日　晴

○乾いた空を見てゐる。勝手にレーゾンかよと　六引三分
高くなる。
○痰絡て少し
○堅上の所通りに在る日である。
○中山正男君郎田山のけず手紙、井上が
訪ねたのでと知つた由
○枯な、慶信堂へ慎みを賞ふにれく
鳥所帽最上一円五十銭せ
○寺のいて熱が高ければ風呂へ入つていい由。
お見舞し鮑をた[illegible]寝出
○十一時ね　六度四分
○夕方　七度
○国の方昂奮してゐる、病室を出かよりとも
つとめてゐるのがわかる。[illegible]
気狸たつ猫りあまびんまきらすのだ。うみの
個人の浄土である。

刹那思到す
塁上眠れぬ通道とまくん堪くして
ひるけの崖を墨書けり　銭

病人は熱やまうちて通道のみ刻む
知らずなしかにはわるるその和　紫苑
せしんしうおとりろかれて

○足掛新年ともこ出ぬおろしてまてくれ。
○病舞う手紙、萬月福島の町し
○あれいりて暑くろし
○べにナール〇、五をのみて寝ながら　七度
かよぬ咳暖疲日記が

十一月十九日　雨後晴陰曇

○みどりもえし風邪気か

○白雲似我閑

○愁家山不動

朝まだ好日和

精南窓催眠

○心理諸君みんときの[illegible]をくれよ

なかなかてりのびましい[illegible]やすらかにすくくと

○のびよのびのびてりのびの[illegible]ろさきしけりきぬ

かなわまずりもはげよむろさき

ながくとせをのびましよ[illegible]

なくとせをかせみきかしのひてまつめ

六和習

○夕方

○兄姉さん新年を祝って来て[illegible]子.

○十一月十三日　曇

○晴

○窪田先生から手紙、

○永野氏ヨリ硯トドク　スミツデナシ

○産婆の奴ヒドイ奴ナリ

○事務所ノ筆ヲ一本モラッテ落書ス

○オモシロシオモシロシ痛シヌウ

○チヤメヨウ

○夕方熱．

夜十時眠る

六つれから

十一月十八日　曇　寒し

○疾稍ゝ少し　血痰なし　六度三分

○好みまて安静、

○夕方外へ工作起き

○十時より安静　ラッセル聞えず

○午後は寝る　七号へ移る

○夕方　但し口腔検温　七度一分

○夜は十二時、寒し、

十一月十九日　晴

○誠によりの快晴で、疾少し、七号より

○昼寝せず十九号へ帰る、日照よくさし入り

病む時に熱上るがなし　六度二分

○妻美れ兄から手紙

○十一月廿七日　日　晴時々曇

○久し振りの天気。疾少く気分よし。寒し　六度四分

血痰が出た。

○すっかりけがれ、十色み

○山光より便

○ラッセル聞えず、

○体重十四貫五百、六日間に三百目肥る

○夕方紅葉君来訪、かまの代満をすることとなる

○あまへ一お正ん好会あり

○十時の治療でねつる

○治の途中一度、喉に血腺を混ず、喉頭桃色と

なりし、食塞ればのみて寝る

○食出勤せり　六度七分

○一時前より一時、斎藤と日光浴
○二時から三時まで静臥　夕方　七度
○夜は床へ入る、実に七十日ぶりである
気味悪く寝台から離れたがまだ続く
てゐる　近ごろ寒し
○十一月二十日　曇　寒気強し　六度二分
○就寝少し
○芽をのみる、少し先生に手紙を書く
三浦君から手紙とく　浅草
○午前から夕方静臥
○ラッセル案之ず
○星の影を見つけた
○母が来て…をもたせ
○道会ふんだんにぶらさがり…
寝ついたのだが、二時頃…

十一月二十一日　晴
○中谷日和来る、寝台拾て少し、…寝て
○乾部屋の掃除をしてくれる　六度四分
○ものを…で…
○鶴…ラッセル…
○午後　曇り
○三時の十分…陛下に…
○三時から英…[illegible]
○今年から…七度二分の熱があって…　七度
…

十一月廿二日　曇

○探梅多し　六句　三句

○一月寒より[illegible]して立去らう、この僧の

○障子は古[illegible]の高し寒さのた

○午後、白鼻汁つみかくくさめかな」.

○山田に来まは

○茸内小菜あまは　みなまでかへる　六句　七句

○思ひのけぬは落けり　六句　八句

○寂寂家

十一月廿三日　晴

○寒気甚だし　六句　六句

○一日は、寒は、咲き咲きあり

○うつせん寒えす

○切入となす　七句　四句

○冬至、ひとをよみて立ちくるまはなる　まへ!　七句　一句

○六は

○就眠前のみ　六句　七句

十一月廿四日　晴

○安眠、疾指に夢、白鼻汁深く夢見、　六句　六句

○霜まで

○去年も来[illegible]年まであるは思ひ出すなり　七句　二句

○冬至

十月廿九日 時々雨 氣候

〇 乾痰咳嗽頻発 盗汗なし　六度九分

〇 頭重し、肩胛を痛むが、　七度

〇 夕方ラッセルを聞かず、

〇 足あたゝかくして氣分よし

〇 夜は熟眠

十一月廿三日

〇 数日来の雨はれてあたゝかし

〇 痰稍少し、盗汗甚だし　六度三分

〇 日中快し、夕にラッセルを聞かん

〇 [illegible]てわがみぬよがめし、自宅[illegible]　六度八分

〇 夕方

十一月廿七日 晴

〇 久し振りの好日和、

〇 風邪為にとられぬめし、　十四貫[illegible]五十四キロ　六度一分

〇 夕方　六度七分

〇 [illegible]正細写[illegible]大きな箱ごとく

十一月廿九日 晴

〇 今朝ははれ、安眠、二時頃目を醒すと一寸[illegible]

十七号が喀血をしたらしかった、一寸[illegible]

気持になったがまた眠って、六時半醒　六度四分

〇 痰少し気分よし 咳はまだ留って

ゐる、[illegible]内田園に[illegible]かきまった

〇 夕方　七度一分

〇 床中によいものなり

○十一月廿八日、かめめさ、近かつ、晴
○ラクセン楽ゆ。　六度三分　七度[illegible]

○十一月卅日　日曜
○乾飯少し偶然として戸棚より出す　六度一分
○婦ちゃん御下賜の菓子をおくりて来る
○それを、菓子をいれての包
○めのまの代筆は皆指内部のつまの、すのと
○ふうとうすれ自由ならい経流用卵[illegible]
○稲荷経流を夜寝ひしとす、秋果子極
○夕方、吸入中[illegible]量の嗜血・或は咽喉より血か

十二月一日
○声かれてなほり、自由にならぬ　六度三分
○すまちれ来る。
○細婦ちゃんと兄さん来る　七度二分
十二月二日　晴
○麦めし
○昨日の熱に驚き安静に午後三十分程　六度四分
お風、風なくあたたかし　六度五分
十二月三日
○桃色痰を吐く、胸痛甚だし　六度四分
心配なき由なりとも、ぜひ一日絶対安静を
なす。　七度一分

十二月四日　晴　一寒さ

○桃色発疹のこと　痛少し　六時二分

○さしたる事なし、安静に過す脈常なし

○午後也寸志君来る、四時去る

○夕方　七時

十二月五日　快晴

○朝六時目を醒す　安眠　六時四分

○痛少し快し、筆硯を弄ぶ　六時二分

○ひる

○ウツボ算ニ十、

○体重、十四貫五百五十四匁五〇

○隣鳥居君来訪　六時より四時　六時八分

○あかくはの色ふすめどに似ぐらして

その古硯は清むる

○古硯とれはちれしものはけり

古硯あつまりたるでもれは

○あかくかくの古ますまでみうちあり

あへぐし硯をたれ

○はなよきまはらなるかけなでなり

もうしかけみしわくしけぬわい

十二月六日 快晴

○ 落つし寒さよし　六本の子(?)

○ いろいろの用事が出来て手紙を書く

憐れしい(?) やめよしと思ってやはりやめる

○ 赤ん坊世話(?)す　姉来(?)早目(?)に　六時八分

○ ひる

○ 少し熱が出て寝(?)んで苦しいと思

つて僅かに眠りした

[illegible]

○ 教(?)子(?)　七時(?)

○ 首の腫物を(?) [illegible] 見て来(?)る [illegible]

長襦袢は山々の襟(?) [illegible]

みらひなのあめ [illegible]

長襦袢す出すの振あゝのみてさしのほ

りさぬ清(?) [illegible]

淡(?)風やとすさまじ [illegible] 見しかは　つ

めたくすごき月となりけの(?)

[illegible]

病室(?) [illegible] 月(?)みるさびしはやみ

ひとり寝のよるぞあはれ(?)

思ひとやる(?)

花折の [illegible] 枝をばうちのめすごく

こえたる月のほり来る(?)

十二月十七日　快晴

○寒し、床へし、ぬか組織あまつ、　六時三分

○肛門周囲の腫物つぶれたよりあふれ
動く気分少しよし　さはりてみればつるみ
たるまあつまりしてます、大よくなりぬ

○午前二十分ばかり庭の日光浴す　六時二分

○ひる

○ろうせん軍立ずへよろしき由

○午後座りまつ日光浴す、十分まで

○夕方

○寝る。　七時

六時四分

冬の日ざしを

ひなたへでてやすらひと知りて居たり一坐七日

にあたりまつ

温気あり[illegible]のごとくなさけのかげなる中のか[illegible]

冬の[illegible]　如き者の女

秋の日ぬくとややすらひと[illegible]いとさらし　知

のこ[illegible]とは喜はずるの人

十二月八日　日曜日　晴曇

○十二時目をさます、雨戸に音ありて気持よし
はれたき気分にてす、暗くありてリブベロナール半錠を
のみて再び寝る、熟睡、六時まで

○熱、痰少し　六度二分

○ラクセン要せず

○腰痛はこのまゝ捨て置くへき由　六度四分

○熱七度強

○おます家君来訪、急用なればとて
直ぐかへる

○飯島善経君来訪、三時かへる

○夕方　七度一分

○夜、黒田葉書、也様貴翰

○八時半　ぴんたしん半錠

十二月九日　晴

○昨夜あつくるしく寝苦しかりき
汗をかきてめざましてうとうとと眠り
乾　痰少し　六度二分

○ひる　六度四分

○三時頃、寒気少々寝る

○四時

○七時就寝　七度四分

十二月十日 晴 [illegible]

○朝 粥 うすかゆのどのヒリヒリ痛し 六時

昨日よりの熱のきれよし

おけつ痛みて起きずは痛し 四時

○ひる

○十時日前[illegible] 百度ある 六夜あり

○夕食

寒く咳嗽しきしうけるん 眠らず 七度一分

物いふもくるしきこと [illegible]か

十二月十一日

○朝尻ノ痛ミ甚ダシ、湿布ナス

○午後ハ痛ミ少シ 頭痛アリ

悪寒ト熱少々 卅八度一分 [illegible]

十二月十二日

○尻痛マズ 然シ頭痛[illegible]

十二月十三日

○朝猛烈ニ痛ム 二時[illegible]半

我慢シタルモ十時半[illegible]ニ階

下へ行キテ切開ヲ受ク

忽チ痛ミヲ忘ル

七度一分

十二月十四日

○温気春のやうし寒少し　六度一分

○尻痛マズ劇痛後熱一

○夕方

○浩右伯文書る　七度二分

十二月十五日

○温し　六度三分

○気分よし西洋劇像ヲヨム

○午後田口守来帰あり

○夕方頭痛なし　六度八分

○目分十四貫七百

○尻切布の焼送良好なり

○胸部包囲されりと以て

○病院より送る月日七三月

○とかりぬ九十日鳴咽痛は

きえたり

十二月十六日　曇　六度四分

○通じ二く　夜なし

○胸部の音少し、異常なし

○尻の膿粘し多し痛み少し

○松田孟吉氏博士と会ふ　夕方

○之探まで来る

○午後、姉さん、みのんと西洋菓子よ

色好ってまて食べよ

○夕方

○気分あしと思はず、熱は気のせい　七度三分

なるべくと内科では、ふ、本当は年気あり

○八時半就寝

十二月十七日　曇し

○通じ前夜の如し　六度九分

○乾便にて尻痛み少し

○三時頃まで寝てた昔日の如くではなし

○夕方熱

○九時就寝　七度一分

十二月十八日（曇後晴）

○通じし、尻痛まず、　六度二分

○湯を入れて身体をふく

○胸部の音殆んど無し

○節便あまり少く

○夕方、　六度八分

十二月十九日　温度下る

〇 痰やゝ多し

〇 尻胸膿出たし、便通をするに痛みあり　六度四分

〇 夕方　七度

十二月二十日

〇 痰やゝ多し

〇 胸部膿出たし　吸入

〇 夜分頭痛をよむ　六度五分

〇 夕方　七度二分

十二月二十一日　晴後曇

〇 痰殆ど少し　六度三分

〇 午前中伴安保へおストーブよりくべりて

海老原書店にて英書をのむ

〇 胸は膿出たし

〇 十二月号雑誌へ引続すゝめらるとし一ん

気分よし

〇 夕方　六度七分五厘

〇 ある夜少し寒む

〇 咳止を服しすやゝ

十二月二十二日　曇る　冬至

○疾病に寄りし、気もち寒さより湯殿みえして
あはたてり　六時五分

○岩崎君来訪

○六時半の汽車にて帰へる

○夕方

○冬至　七時二分

十二月二十三日　晴

○乾布摩擦少し

○夕方　六時三分

○八時頃、家をでく岩田長君来訪
好道よりかへる　六時八分

十二月二十四日　晴　寒し

○乾布摩擦少し　六時五分

○一日何のこともす、又夕方散歩せし

○飯島喜代君来たり、六時頃かへる

○夕方　七時二分

○頭重く体は八つ身前に痛み

十二月二十五日　晴　六時三分

○摩擦少し

○小便の色なり甚だ流しておりく

○三浦君かへりゆく

○十四貫七百　五十五キロ

○夕方　寺井君来たり　六時まで　六時八分

○早く寝る

十二月廿二日　晴
○葉断のあの奥の難は通じあり女
○「血痰、黒血二度　続二つ
○「格別のことはありませんね、」　六時十二分
○夕方　六時九分
○拾ひ尽ま汁、ちみ出でかへつ
十二月廿七日　薄日
○血痰　昨日より少きか　六時四分
○紛らし　蜜三個由
○飯足　拾ふ　長谷数冊、
○ルパンをよみ、青い眼の女
○夕方血痰　脹
○八時就床　六時八分

十二月廿八日　晴
○痰少し血痰なし全くなし
○光西寺で婦さんと話す　六時五分
○風ありて寒き日なり
○四畳半をしめきり茶をいれてのむ
○洗濯婦さん来る
○鉢植画をよむ
○夕方
○八時就床　六時七分
十二月廿九日　晴　細雪
○うす寒し　痰少し　影響は去れり
あく霊も来らず　代豊に心和み平安なれ　六時四分
○地上とどくすぐれ君の手紙
○夕方雪みぞれ　六時九分

十二月三十日　木

○寒さ軽なり　六度九分

虚子ー

大観堂ノ内山より葉書

○節好状セー太、叔

○平妖伝をよむ　七度二分

十二月卅一日　曇し

○朝ゝ虚務て暑し、左胸下部ノ喘鳴ありて

時ゝ咳嗽出づ　六度五分

○目方　十四貫二百目　激減（貫五匁）

○夕方

○ひとり淋しく年を暮らし　かね遂ぐ

好族ノいたるべし　六度八分

昭和五十年一月一日　快晴

○風の音寒く家窓赤く朝焼せり　六時四分

○昨日より春少し、病院は休業、

○看護婦達晴着を着ておでましく

○午前書初め如意しく何ゆかず

○ホルンコアの秋宝第一号をよむ

○夕方　七時二分

○夜ホルンコアを一応読、
客寝俺たちの為り、満すよろしからず

一月二日　晴く

○血圧、高里さんの一点、昨夜の歌流るか
たくしてのと空ゆ、悔しかりし　六時四分

○おばさま十時半安静、

○病室は浴用んわさん掃除の由。

○十四日まで七日、（書直撲）
好みし午後十三時より二時までの書は
はるかなりけしかり大晦日は書直合うして
空腹の折々なれは出ちらけむ
半日来増減なし、
月半は行ありし肥よならけしなれは今月は
十五貫になりたとす　自宅ここ

○夕方　六時九分

一月三日

○朝　六時五分

○午後三時近き陸軍運動会と表ひ見て西付
まの付四時半のつる

○夕方

○早寝　七時一分

一月十四日　曇

○熱少し　六度四分

○日中熱下らず、直ちに下らんきざしもなく苦しみ如なり　六度八分

○夕方　六度八分

○就眠前八時　六度七分

一月十五日　晴後曇

○熱少し、便通の時痔出血、　六度六分

○オリバーツイストをよむ
あの子供とあはせ英国大家小説の翻訳を
知るべし。ディッケンスをあはれみたしと
思ふ

○夕方　痔少し痛む　七度一分

○就眠前（八時）

一月十六日　晴

○熱少し　六度四分

○お昼過ぎみたまちゃんを抱いてみる

○朝は北風ひどく寒い由

○午前、便通後尻痛む　膿出て来る

いでたるかゆし

○夕方

○腰大いに痛み、　六度七分

一月十七日

○熱少々

○痔痛む　穴あきたりて膿をおし出す　六度

○食前体重十四貫五百

○食後一時半十四貫六百

○夕方　晩食　味うまず　早寝　六度八分

一月八日 晴

○ 雪少し　六分五分

○ 屋根や職人入りされば足ゑりて

　其かみなどあそべる

○ 身うちん臓少しりづゝ痛おず

○ 夕方　六分九分

○ 三カ二を四る

十月九日 平凡

十日 異状なし

十二日 寅に伊三郎一寿来る

一月十二日 晴 雪

○ 乾 六分七分　六分七分

○ 昼

○ 塩田章一郎君歓迎と来る

　六時までかへる

　先生より月餅のおくがんを頂く

○ 晩　六分七分

○ 就眠前　六分七分

○ 今日は六分七分デーなり

一月十三日 晴 あたゝかし

○ 気温少し暑気し　六分九分

○ すまるにあしきよし今日はあまりとまい

　てんるけく灰ちしいなと気が人のおさと

　天よ通つしの方ば此の父母に非了みは

見すてな

○ひる

○体重 一貫 十四貫七百五十
五十五キロ五〇〇

○黄もゝ菜と見つけく
今朝なるむとおもくわびらず

一月十四日 薄曇り

○影 寒緑し暑し

○十時頃 見ゆりけく
清三さんとおんおもしくなし

○ゆれ州くし 黒帽子し
鼓上のすべきよし言はる
二十分 静かの

○夕方

六時五分

六時 分

六時八分

○一時五十分ごろよりまた 睡眠

○こは生 澤頭君 来りて来を了へつして
絵机の上に燭台の燈をともり 父母の君 祖父君
地蔵 叔母君 など 並をそりのとに めしりかえしまことを
いつはうなし 私数は安らうこえして わかれりと思ひ
六時頃 自動車にて 父母の君 祖父の君 それぞれに
関場へとゆくとここそ 通夜 時は 澄君 星旦の
おこなはるなり 告別 四日 つまりしより 僅かに八ヶ
月 いとすこやかなるに しで 逝けるは 近ようさま を
長の 性は あやせば 抹るし 気うはさ一ーたけき
るすや [illegible] つる おいされ て 見 すあり まし

一月十五日　晴

○いとよくはれたり今日はわがはふりの日な
りてはみなし自動車すゝめりていそいく
ひとりのこりて歌よむ
わかきみのみべのおくりよりかへりくれはさみ
とりも得ず我向ひてよむ
手に(?)と思ひてそみはのべ送りうたの言葉と
く我胸をうつ
君のみめぐみをすゝめるかなへりおぼつか
なくも思はれてけり
なつききつてまつらせ事ありてもさらなるぞ
こひしむす我思慕の道に
うかりかりみ墓の下まつとひまて直ひ
このひしめさまたまぬ魂
掬め捧ひとりひとりにわかれけりらみ尊に捧ぐ日よ
又ゆひとりひとりし

○襟(?)　あつきし　七前(?)

一月十六日
○乾燥少し吹颪は強いえんとして出ず　二前(?)
くるしういつゝすゝめぬ
○婦ものとこゝへ一寸熱とです
○奥に稲荷より多北
○海老原先生の川く葉書を馳走さる
りて川(?)つゝ
○夕方　二前(?)
一月十七日　晴
○皇(?)いよひなり雲にたなあらず
医者(?)来ず薬(?)もなし
○夕方　新沢来訪　丸林かへる　二前(?)

一月十八日　晴　　六郎ら

○熱少し安眠

○与謝野夫人と若草社のよし来る

若藻社のおせ書に答へて

歌よむ為に甲斐をとすゝへつどひ林を思ひ出

し[illegible]毎書くれぬ

しづ心さくらかへしてかへして友かの

書きし文字たどりよむ

菜の葉あさかをまじれゐぬける

みしきれんくるれてこの葉さかされ

まさぬゆるせ秋かとも

○

私理も遠の家遊せよ

七夜

一月十九日　晴　日曜　　六郎 四郎

○霜遠白し

○隣室の幼児死す

○海老原君来りて青竹葉を受けとる。

○看護婦六尺と山家集をよむとも

○三浦君よりの手紙を読む

○目方十四貫七百

一月二十日より二月二十日まで　一ケ月
事情あつて山荘で暮す身体よくならず
二月二十日　発熱未だ回復せず血痰いまだ一週日に二ヘ
とれとれず　日々悩み減す
昌東街より漸く皆寝入れたのしり
四月より出満すべき身体は非さるよし一月二十日ん
宣告されました今後はどうなるかわからず

二月二十二日　曇
○あさ、かゆ　卵少し　せきあり　六時四分
○日方　十四粒四百
○昼食あり
○夕方　六時八分
二月二十三日　曇
○あさ　かゆ　卵少し　せきなし　六時四分
○昼飯あり
○姉さんと富士ちゃん山麓へ
○夕方　七時

二月二十四日　月　晴

○午前目さめ、ねむし、やがて一時ほど目さむ　六時四分

血痰なし

○痰少しせきもでず　快し

○桂園一枚の寫生を描ぬ

○夕刻

○吉田総領よりまま来る　い　七時一分

○寄贈あり（屋）

二月二十五日　晴

○北風、や、寒し　午後暖かし

○午前上服まで十分、日光浴　六時四分

○禅師にて送す

○午後安静　十四時四十五十

○夕刻

○今日は咳少し無し　六時八分

二月二十六日

○血痰あり、

連日とまらず、日光浴の事時と思

安静と寝る

連日不思、愚

三月七日に至りて血痰とまる

熱は七分位上のぼらず　脈七十一

三月十日

○痰少し、結核菌をのまず　六時三分

○夕刻　六時七分

三月十一日　晴

○今朝はよく晴れたれども寒し
熱少し強くとれず　六度二分

○夕方　安静　六度八分

○兄ちやん庭をみて来る

○三月十二日　晴

○寒し、熱少し悪し　血痰あり

六度二分

○

以下
19 丁
白紙

関になりけるまみのはしよ
麻糸をとりまし今は
見舞多り多くなりしをもれもしなしおませ
しは肉にいそり
遅は毫日はなさることの日は乾はや
くまでゆくら遅ければ

カ・ラ・キ・あへ更は[illegible]
若山の雛ものちごみ、霜夏か月
のあをほのぼの[illegible]如
若山の雛おもかげはつめたき
うらを枕すおとす

○

我がうちの裏庭来さきそむ打つけしげる垣の
あらはとなりぬ 薔薇散りぬ
に見ゆる
打ちはてし 山茶花の 垣に 寒天
干して来し実 たれぬ

○

元日

あたらしき年のあけぬと霜白き朝をはやく起
明けぬの我ら起きいでぬ
冬の山の
雑おしめきては今年の事目
そぞおはゆくのぼる

○

病院にありける畑人の眉事に人の
寝ス入ることありて

夏しーたの青さをへとしたる事して一枝の白梅
の花清らに咲けり
葉離れさしれては咲け標として気高さ保てり
白梅の花
心寄りそしや寄る白梅の青さにほひの
ふくみは白梅のほのかに
胸にしむ

○

心なきこと仰しける人、悔気づきけるかや
我がは説なるに
我がに説なる 確信を持ちてかし、こと何ぞや人の
おさとくなし、ことなり我たのみあしとて我
なほとふゆめず
遠かりしめにたらのわさく中かくな
りてと我はとがめず

父が病床日記を思へや

死にぬへしやはひと絶えて一言しやまふのさとはを
言はむすべ父は日記これね
知友らとゝくなさけのうずしきいとこまやか
に書きやりし父は書かしね
病は文学の士を殺すと父病床に涙を賦し
せしぬ
死の前まはゆして手を握りぬ筆をもちくらやくつ
はなり悲しき（日記絶えぬ）

静なる日和よろこび清き水汲みて
洗はれぬる古硯
古硯洗ひすてそはあをのる静ぐなすめ
子
日の墨うも
みそ

硯箱が歎は山に分けて拾へし古硯
年ははんとすや墨まじりに文字とあるを思ひ
ひそし
ほのしもぬくときに日さし指おろけて覚え
に硯洗ひしなるひ

祖母

年月と帰省せぬことはなかりしが四月我児
ぬおほは、ががほ
老祖母を思ひてつるそれは（み供かましよなる子ぞたはかる）
あつく涙の落ちぬ
この秋のかたみずりして誰かおくる祖母をかなり
みる人のあるべき

このまちのとしは第一星 おしてわたる 学のある
わどいとちすきぬあるあるみなそこり 夕べは
そのころより なりけるり そのやど すぼまてけん
おつはる

夕けむり このやとぬ まめて おつければ あのかすか
笑顔 見え 畑はおしくも 林
夕けむり 嫁とおかれて やどす人とい よ 宮
りせおつける のそきろ来る
夕けむり 寄りて 染めぬ日はさびしくて みとそゝか
ふり田畑はらちあがず

○

りかろ のみのみ

やまゐあれば病室 ますらへりぼりきし
来れ手むけ歌よまむ せめてしらみは
木のふれむけ節もよ来と
たむけいらせめてよまんとらの すみと 咲

○ 水かみの川のそばの墓地 おしし
あすれ

○ みどりの墓地

○3
みるのみつめならすめよ川 中への墓地よ
お墓の満くし医

○4
られてけく
ちつをさへ 鳴らせり し おきなよ そざひ
しみすな まの十字むね 都のありれ

○7
車なみの古きの下のるすさど
えうつみめ2のかきたんよ 明に浮べ てうる
一つとひ書をすぐ 女

○
ひうえひ 土きひし 田畑のおくりを
ぬ家みちひしくそ ある

病めば病みてすかすかし 目出めり
いよいよ気高うこときこえて
と見えゆく
~~父母よりちぢまれてくるしけるいのちある日~~
をみはなされゆく
おさなきやいくばくもなしほのかなるはずかしき
の子めの命みぢめと思ひへぬ
~~[illegible]ば見かなしみてけれど~~

○

①
~~[illegible]~~
ちさきちまおどりけり[illegible]を思ひつぞし来れり
ゆまれや[illegible]紀のみやく
外ゆき探ず おのれ

②
夕焼とで思ひをみれば里思はかねおもひ
鉦の音 ~~[illegible]~~
夕焼とで思ひをみれば鉦の音のかなしみて
さみしかりけり

6
細き橋ひとりひとりよわたりけりひとりひとり
りの子の目えし見ゆ

若きゲーテを

人のすゝめあやまちはしつれそれをし試練

ときていよゝ強めしき

あやまちは胸傷けど いつはらず まことつくさば

その傷癒えき、

思ふことありけるおや それとそれとせば

ちゝはゝのみこゝろやすらかにと のせ

言ひ慣れ あらはなる歌よめば

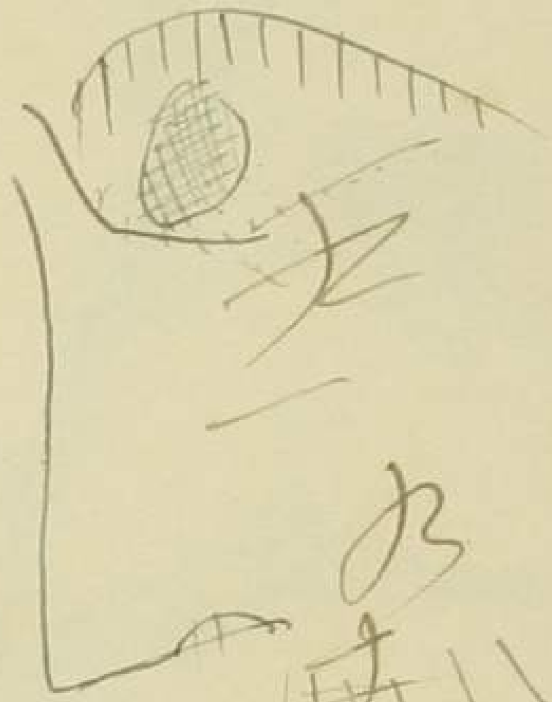
乙女の優き

十一月

雑司

雑司

雑



雑司ヶ谷

雑司ヶ

九二九

雑司ヶ谷九ヒり

ろてろ

ヶお

ヶヶおかあさん

おいくしろ

よろしく

ばか

ヶよよろしくおねがい

白雲依舊去
黙可山不動